昆虫カメラマン、秘境食を味わう

人は何を食べてきたか

山口 進
Yamaguchi Susumu

インターナショナル新書 133

目次

まえがき 8
第1章 香料諸島をゆく
～パペダの魅力～ 11
第2章 ザイール川をゆく
～マニオクの力～ 17
第3章 ニューギニア高地をめぐる
～辺地のサツマイモ食～ 25
第4章 ベトナム山岳地帯を歩く
～美しい棚田とコメ事情～ 31

第5章　メキシコの宝・バニラ
～一頭のハチがもたらしたもの～　37
第6章　スマトラの僻地を歩く
～シナモンは毒の香り～　47
第7章　国を挙げるに値した香り
～黄金のスパイス、丁子～　57
第8章　ウォレスの足跡をたどる
～贅沢へ誘うナツメグの香味～　67
第9章　最もシンプルな食事
～最後のおかずはトウガラシ～　77

第10章　コイコイ族のパンとバター　87
第11章　メンダーは母の味　103
第12章　悪魔の囁(ささや)き、テンペ中毒　111
第13章　天空のヨーグルト　123
第14章　ウチワヤシの宴(うたげ)　135
第15章　孤島のヤシ　147
第16章　マリポサの漁　159
第17章　ジャガイモの力と人間の叡智　169

第18章　奴隷に支えられた不思議な食べ物　177
第19章　悪臭が芳香に変わる時、テラシ　185
第20章　胡椒を食べる　195
あとがき　204

写真／山口進

まえがき

ご存じの通り、「ジャポニカ学習帳」の表紙を飾ってきた昆虫や植物の写真の数々を撮影してきたのが、本書の著者、昆虫植物写真家の山口進さんだ。

季刊誌「集英社クオータリーｋｏｔｏｂａ」の二〇一七年秋号から、ご逝去される直前の二〇二二年秋号まで、二〇回にわたり毎回二ページの枠で連載記事「人は何を食べてきたか」をご寄稿いただいた。

担当させていただくことになり、光栄に思った気持ちは変わらない。

一般に、科学に興味を抱くきっかけというのは、自然界には人間にとっては信じられない事象があり、驚くべき生きものが存在することに触れ、そこに潜む法則や理屈を知った時の悦（よろこ）びに基づくのではないか。山口さんは「ジャポニカ学習帳」を通じて、そうした不思議や謎が自然界にあふれていることを子供たちに伝えてくれた。もちろん、自分もその恩恵を受けた一人だ。

「ｋｏｔｏｂａ」の連載では、珍しい昆虫や植物を撮影するために訪れた辺境での経験と、そこで出会った驚くべき食文化や愛すべき人々との思い出を綴っていただいた。珍しい写

真とともに、毎回バラエティに富んだストーリーが展開され、事前の打ち合わせである程度の内容は知っていても、いい意味で想像とは違う原稿を送ってくださるのが通例だった。

素晴らしい写真家は、名エッセイストでもあったのだ。

打ち合わせのたび、世界を飛び回った先々でのスリリングな体験談や食の話題をお聞かせいただいた。アイデアは無尽蔵にわきあがり、構想は次から次へと積み重なっていく。「目指せ、一〇〇回」などと笑いあっていた中、二〇二二年末、連載は突然終了してしまった。

著者とは「連載を続けながら、どこかのタイミングで書籍化したい」とよく話していた。誰もが知る写真家が遺(のこ)してくれた、撮影の裏の貴重なエピソードの一端を多くの方々に堪能していただきたい気持ちが収まらず、手にとりやすい新書にまとめることとした。

各章とも、本文のあとに掲載している写真は、連載時に候補としてお預かりしておきながら誌面の都合で掲載がかなわなかったもので、迷いに迷って選別したことを思い出す。それらのタイトルは、山口さんがそれぞれの写真に添えた名前を使用している。

全二〇章、楽しんでいただければ幸いである。

「人は何を食べてきたか」担当者

第13章　天空のヨーグルト

標高四八〇〇メートル。高地アンナプルナの過酷な環境下で発酵させたヤクのヨーグルトは、思い出すことも気が引ける「あるもの」を連想させた。

ネパールのアンナプルナ山群の外周を回るトレッキングコースがある。ポカラ（標高一四〇〇メートル）を起点に最高地点のトロン・パス（五四一六メートル）を越えてムクティナート、ジョムソムを経てポカラに戻るコースだ。

標高差約四〇〇〇メートル、健脚向きのコースで、通常一〇日間かかる。歩いたのは一九八六年だから、かなり前のことだ。

目的はトロン・パス周辺に生息する高山蝶の撮影だ。中国やチベット、アフガニスタンなどの高山帯に生息する高山蝶は翅（はね）が透き通るように美しく、蝶好きなら誰もが憧れる特別な仲間で、パルナシウスと呼ばれている。しかし、生息域は高く遠く険しく、簡単には見ることができない。

道中の虫や植物の撮影も計算し、全行程を一カ月に設定した。

随所に簡単な宿泊所があるが、どこでどう時間を取られるかわからず、資金も登山隊のようにたくさんあるわけではない。そこで、野営かつ自炊を基本にカトマンズで一二人の

撮影の目的だった高山蝶パルナシウス。

シェルパ族をポーターとして雇った。

一番重いのはコメ。トロン・パスを越えるまで手に入らないとシェルパ頭（がしら）が言うので、かなりの分量を持った。ほかはカレー用の香辛料、ダール豆、砂糖と紅茶だ。シェルパ頭が野菜や肉などの食材は途中で調達できると言うので、彼に従い、登山装備は各自で担いだ。

長い登山道は単調で、シェルパの一人が太鼓を打ち鳴らしながら歩いて行く。私が撮影に良い場所を見つけると、そこでキャンプになる。撮影中、シェルパたちは時間を持て余し、食材調達のため近くの村に出かけていき、鶏や卵を仕入れようとするが、ほとんど得られず、ジャガイモだけのカレーが毎回食卓に上った。何日もそれが続くと、全員の口数が減る。頭の中は

登山道沿いのバッティと銀雪に覆われた山群。

食事のことでいっぱいだ。

そこで、食料調達だけのために大きな村でキャンプをすることにした。卵が手に入ればお祭りのような騒ぎになり、シェルパたちの顔に幸せ感が滲み出てくる。

一番うれしいのはヤクの肉だ。ヤクの肉を炒め始めると、みんなが調理場に揃う。大鍋を覗き込み、香りが漂うと、我慢ができないシェルパの一人が太鼓に合わせて踊り出す。

トウガラシやクミン、ウコンなどが投入されると、香りが胃の奥を刺激し、ますます食欲が湧く。私自身もよだれが垂れそうになる。村で買ってきた酒の勢いもあり、賑やかな夕食になる。

登山道沿いにはバッティと呼ばれる茶店が点

在し、そこで飲める熱く甘いミルクティーが体に染み込み、歩く意欲が湧いてくる。
シェルパたちは荷を下ろし、茶店の奥で何か別のものを飲んでいた。ヨーグルトのように見える。バッティの女主人が薄暗い台所の床下を開けると、大きな水瓶（みずがめ）が置いてあり、革で蓋がしてあった。革を縛る紐をほどくと、強烈な酸味臭がしてきた。覗くと、茶色の豆腐を潰したような塊が一面に浮かんでいる。思わず子供の時に見た畑の肥溜（こえだめ）を連想した。
私は小学生の時に友達が肥溜に落ちた様子を忘れてはいない。先生が長い棒を持ってきて「これにつかまれ」と叫んで肥溜から引き摺り出す。引き摺り出された友達の服や顔には浮遊物があちこちに付着していた。近くの小川に連れていかれ、パンツまで脱がされて体を洗った。しかし、臭いは決してなくなるわけではない。
女主人はお玉杓子（たまじゃくし）でその浮遊物をどかしながら、下にたまったヨーグルトらしきものをすくい、ガラスコップに入れて差し出した。浮遊物がどうしてもあの古い経験の記憶を思い出させてしまう。
こういう時はためらってはいけない。一気に飲んだ。強い酸味臭はするものの味は濃く、一級クラスのヨーグルトだ。しかも、浮遊物はチーズのようだ。女主人に聞くと、ヤクの乳で作るらしい。水瓶のヨーグルトは母の代から注（つ）ぎ足されてきたという。

標高約3500mの道端でミルクティー（チャイ）とヨーグルトを売る女性。

出発して一二日目、マナン（三五一九メートル）で、数日間、撮影と高度順化を図った。アンナプルナから下山してきた韓国隊から余った食料をもらって、体力も回復した。

マナンに四日滞在して、いよいよトロン・パス越えだが、実はこのトレッキングを始めてからずっと、私は下痢に悩まされていた。水が合わないのだろう。この体調でのトロン・パス越えはやや心細かった。しかも、私たちの一週間前にきた著名山岳写真家が吹雪で撤退したことも聞いていた。

トロン・パスの手前四八〇〇メートル地点に石室がある。登って来た道を振り返ると、アンナプルナⅠ峰、Ⅲ峰、それにマチャプチャレの頂が真っ白に光っている。

ところが、トロン・パス越えが天候待ちになった。前日から雪が降り出したからだ。

石室滞在の二日目の朝、管理人がヨーグルトを持ってきた。サービスだという。この標高で発酵できるのか疑問に思い、瓶を見せてもらった。瓶は台所の火元に近い床下に置いてあり、時々プクッと小さな気泡が上がっていた。

登山客が増えるモンスーンの季節が始まると、ヨーグルトを革袋に入れて下から運んできて、それにヤクの乳を注ぎ足すという。食料の乏しい石室で栄養不足を補うために重要らしい。

やはり浮遊物が浮かんでいた。再びあの記憶が頭をよぎる。ためらいは禁物、飲むと実に爽やか。

ヨーグルトを飲んだ翌朝から嘘のように下痢が治り、無事トロン・パスを越えることができた。激しい高山病で苦しみながら、バッティでそれを飲んだ時も、翌日は下痢が止まったことを思い出した。

おそらく、乳酸菌などが胃腸に作用したのだろう。この時ほど発酵食品のありがたさを感じたことはなかった。考えてみれば、あの浮遊物の皮膜はヨーグルトの温度を保ち、雑菌を入れないために役立っているのではないかと思えてきた。

標高四八〇〇メートルの厳しい環境で発酵を利用する人の知恵もさることながら、人は微生物とともに生きていることを再認識したアンナプルナ一周の旅だった。

昆虫カメラマン、秘境食を味わう

人は何を食べてきたか

山口 進

発　行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定　価：946円 (10％税込)
発売日：2023 年 12 月 7 日
ＩＳＢＮ：978-4-7976-8133-8

ネット書店でのご予約･ご注文は こちらからどうぞ！